

不思議な感動

仙台の出身であるが、帰省する際の楽しみの一つが、小学校時代の先生のお宅におじゃますることである。先生は既に亡くなられ、お線香をあげに行くわけであるが、奥様の早坂泰子さんはご健在だ。奥様は詩を書かれたり、みやぎ民話の会に所属して民話は勿論のこと、「閑上―津波に消えた町の昔の暮らし」という聞き書きを協同してまとめる等、幅広く活動してこられたことから、いろいろとお話を伺えるのを楽しみにしている。

その奥様から小野和子著『あいたくて ききたくて 旅にでる』(PUMPQUAKES発行)なる本が届いた。早速読ませていただいたが、ちよつと類例のない本で、不思議な感動を覚えた。

採訪の旅して半世紀

著者の小野さんはみやぎ民話の会の草分けであるとともに、リーダーを長年務めてこられた方で、上の『閑上』の共編者でもある。

宮城県を中心に東北の村々へ民話を求めて訪ね歩き始めたのが、かれこれもう50年前となる。

「歩き始めた30代半ばから50代にかけて記した『民話採訪ノート』から八話をまとめ」て17話にして構成されている。そしてそれぞれ

型はむしろ少なく、形は多様で「現在」の話も多い。

大切なものを手渡す

この不思議な感動はどこから来るのか、繰り返し読んでみると、小野さんの徹底した「採訪」への

時流を
読む

民話が伝える
豊穡な世界

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

の話は、採訪前の心境や採訪までのいきさつ、採訪の際の状況やら感慨等も綴られており、その後あるいはその中で採訪された民話が紹介される形をとる。

くだわりから生み出されているように感じる。「採集」でも「採話」でも決してない。「この『採訪』という言葉には、『聞く』ということとは、全身で語ってくださる方のもとへ《訪う(おとなう)》こと」という思いが込められています。

そこで語ってくださる方と聞く者が、ときには火花を散らしながらも、もう一つの物語の世界へ入ってゆくことにより、深くつながっていく」としている。まさに「採訪」だからこそ「大切なものを手渡す」民話となるのであろう。

本書では採訪された民話に《訪う》思いが散文として重なり、語り手と聞き手がさらに一体化することによって、民話の奥行きが広がり、これを垣間見ることが可能となつて感動が増幅されるようだ。

誰でも語り手・聞き手に

人は皆それぞれに、伝えたい何かを持っている。その表現は人によって様々ではあるが、その伝えたい何かが生きていく知恵となり、生きる力となつて、次の世代に受け継がれていく。その伝えたい何かを採訪することは自分探しの旅にもつながるように思う。

こんな時代だからこそそもそも民話が注目されていい。そして誰にでも採訪の旅は可能であることも民話の持つ大きな魅力と感した。